

青虫を中心としての 幼児の生活と誘導の實際

岡山 石原安子

一、緒言

幼児は之を取り圍む自然界に對して無關心であられないことは今更申し述べる迄ありません。この傾向こそ、よりよく活きんとする生の慾求に基く尊い萌芽であり、知識の收得も基づく所はこの傾向であり、尊い發見も發明も文化の進展も總べての究知心、究理心、道徳もこの傾向に基いて生れる、實に尊いものであります。而も手當り次第雜多のものについて聞きたがり五月蠅がられる迄しつこく尋ねる、かくも強烈な而も多方面に對する慾求に對し、出来る限りの手段を講じてこの尊い萌芽を培ひ養はねばなりません。かゝる自然の要求を満足させる所に、私共の活動の

天地があり苦心もあり、門外の人のとても味はふことの出來ぬ愉快さもあるのだと存じます。かゝる考へから保育に當つての或期間の幼児の生活を記載して及ばない所考への誤つてゐる所等萬般の方面に亘つて御指導を戴きたいと存じます。

二、實際

觀察期間 自五月十七日 幼兒數 六十一名
至六月五日

動機 談話の内容に出でし、キャベツ畑より

場所 本校敷地内農園（園舎の約二〇米餘の地點）

材料 青虫

目的 害虫驅除の名のもとに取り扱はれてゐる青虫を

継続的觀察によりその生育の有様を知らしめ殘忍

性を柔らげ生物愛護の念を養ひたい

準備 鉢にキヤベツを植えしもの及びそれを被ふに用

ふ金網一箇

五月四日 水曜日 晴

用意された小箱十箇、誰に？と言つてる間に早や御大將の子供等の手に渡つてしまふ。カンランを踏まないやうに、の注意のもとに青虫探しは始められた。中には氣味悪がつてさわらない「どんなにもないよ」と人の持つてるのをツーツトさわらしてもらつてから元氣が出たものか、そろ／＼と青虫取りに、それでも、まだ氣味悪がるのは「こゝに居るよ」……と探して廻る。いつの間にか小箱は御大將の手からはなれて他の小さい幼児に……「箱から逃げる」「よう這ふなあ」と感心して見てゐる。「どんなに大きくなるでせう？」……「こんなに」……「もつと」……等と幼児の想像は大きく／＼なる「飼つて見ませうか？」「うん」……螢籠の小さいのへ入れてやる。(想像してた程幼児は興味を起さなかつた)

五月十六日 月曜日 晴

午後逃へてゐた飼育網が出来上つて來た。子供達と一緒に……とは思つたが一人でキヤベツを掘つて來る。

五月十七日 火曜日 晴

一時中止状態に置かれてゐた青虫も、其のお家の完成と共に幼児の目がそこに向けられ出した。「えゝなあ……先生どこで拵らへてもうゝたの」……「いつ出來たん……」等とさわつて見乍ら金網に對する質問「先生！ 蚯蚓がつたん、これもかつてやらうえ、青虫がつたん、てんとう虫が」……等と次から次へと葉に止つてる虫、土からはひ出した虫と、飼育器の中はうよ／＼と雜居生活だ。キヤベツのおいしさうな所から食べてゆく青虫はお部屋のお蠶様と同じやうだと幼児達は喜ぶ。

五月十九日 木曜日 曇

「先生！ 〳〵」と一幼児が何か大變なことでも起きたのかばた／＼と遊んでゐる私の所へ駆てきた「どうしたの？」「ありやゝない／＼青虫が」……私も何いふことなしに、びつくりして小さなグループのまゝ駆け出す青虫の所へ

……「あれだけちつとも葉を食べんの」(幼児の指差した一匹の青虫を見れば、じつとうづくまつて蛹へと變化しつゝあつた)「どうしたんでせう?」「死んどん?」「さあねどうかしら」……と言ひ乍ら手を入れて、ソツツつゝいて見れば、もくくと體を動かして見て又じつとする「やつぱり寝とつたんなあ……」やつと安心して元の遊びへ。

五月二十日 金曜日 晴

昨日の青虫が完全に蛹になつてゐた。幼児には解らないらしい。只不思議なと見えて次々に登園するお友達同志で「何んぢやらう」と互ひに不思議がつてゐた(青虫が減ると一緒に變な物が増えて来る、どうやら幼児達には青虫がなつて行く事が解つてきたらしい、が、まだ不思議なやうだ)

五月二十四日 火曜日 晴

「ありやゝなに?」「遂々蛹について聞き出した」「ありやゝなあゝ蛹いふもの」……「青虫がなつたんなあゝ」「どうして解る?」「ふぢやあゝけーど」……(はつきりと言ひ現すことは出来ない然し解つてはゐる)「どうして蛹になつたりしたんでせう?」「しらん」「しらん」「お話してあ

げませうか」……(簡単に神様のお話と連絡を取つて話して聞かす)「今度は何になるでせう……皆で何になるかよく見てませうね」……

五月三十一日 月曜日 晴

白いものが網の中に見えた、おや?と思つてる間にその側に來てゐた幼児達は口々に、てふてふだく、早くから來てゐても知らなかつた子供に「てふてふが居るんよ」……と知らせに行く兒「見ゑりやゝせんが……先生!見せてくれんの……」見ようとして互ひに争ひが起る「てふてふがびつくりしたらいけませんからそつと見ませうね」「と言へば小さな體をゆすり合して見てくれた)時々思ひ出したやうに蝶が金網に止る音のみ只一樣に蝶へ。目も、心も。てふてふくと歌つてゆく兒、子供自身蝶になりまして飛び廻る、あかざの葉の蝶も出来る、一つ出来れば早くそれを持つて、てふてふくと走つてゆく、それかと思へばなんぼ出来たん? 一つ二つ……と出来上つたのを數へて喜んでゐる……「今日は」と言つ行けば、そのまゝ蝶屋さんごつこに、一つ十錢? へんや一つ一錢ぞな製作に

没頭する兒賣、店の主人氣取りに應答する幼兒、お金にと石ころを拾ひ集める幼兒、拾つてあげる兒、それかと思へばまだ、金網の側からはなしようともしない幼兒……と蝶を中心の遊びは私と言ふ者がどこに居るのやら居ないのやら解らないぐらひだつた。青い蛹は白い蝶々に茶色の蛹は黄色い蝶々に幼兒達の目は意外なところに伸びてき行ます（然し之はまだしつかりとした事は申せません、もつとく／＼多くの蛹について研究しなければなりません）

數日後に全部の蛹が蝶になりました。雨が降りさうになれば、てふてふが雨にぬれたら可愛相なからお部屋へ入れてやらうだの、もつとお花を入れてやらう（全部が蛹になつた時に鉢のキャベツを取り去り、なでしこのお花とかへて置いた（次から次へとお花が咲いていつて長持ちのよくするものを選びため）等と花を取つて来て入れてやつたりする「餘り長いこと幼稚園へ置いとかないで蝶々さんを歸らしてやりませう」と言へば一時にぼつとはなしてやればよささうなものを各兒が一匹づつ持ち（この時には外に飛んでゐた蝶も連れて来て一緒に網に入れてゐたのでとても澤山だつた）一二の三、ではつとはなしたのでお部屋中

が蝶でひらひら「あ！ 私のてふてふがあそこへ行つた」（一寸もてば早自分の所有物だとして壁繪等に止まれば）蝶々が繪のお花をほんとお花かと思つて行つた等と喜ぶ（明日は皆でお花を澤山拵らへて壁へ貼つてをきませう、そしたらてふてふが喜ばあーなあー等と明日の遊びのお約束も出来る）此のやうに觀察は唯の觀察だけで終りにならず動作に歌に手技にと、どこ迄もく／＼伸びて行かねばならないのではないかと思はれます。これから少し取り扱ひの上で感じました事を列記さして戴きませう。

三、結 び

（一）蝶をはなしてやる時に記すのを忘れてゐましたが幼兒が「てふてふはたんぼ、などによろ止るが幼稚園にはないな」と言つてゐるのを聞いたものですから園兒が歸つた後直にたんぼ、を掘つて来て植えてをけば翌日蝶の止つてゐるゐないにかゝわらず非常に喜び後日散歩の時一幼兒は、れんげ草の小株を持ち歸りて「今度は幼稚園にたんぼ、やれんげ草が澤山生えるなあ」と楽しさうに話し合つてゐた。このやうに幼兒は自然物自然現象等に對して注意を拂

ひ一本一草、一匹の虫にも生命のある事を信じて之を取り扱つてゐることを教へられるのであります。残忍性もこの事をしてつかり心に持つて幼児を見てゐれば善化して行けるのだなと頷かすにはゐられません。

(二) 幼児の觀察中の態度につきて

幼児が熱心に觀察してゐる時にうつかり話しかければ非常に叱られる時があります。それは幼児が悪いのではなく、こちらが悪いのでありますから其の時には今幼児は何を見てるか……只それを知つてゐてそのまゝに知らぬ顔でゐればよいと思ひます（又は上手にそのグループに這入り込んで行くかです）然し熱心な觀察の後には必ず質問が生れるものでありますから其の時を逃さないやうに談話なり又その事實を簡単に話してその疑問を解決へ導いてやる所に使命があるのではないでせうか。幼児は觀察しようと思へば他の人のことなんか考へないでどこ迄もその物の眞疑をたしかめねば止まない性質がありますが、それも一寸の注意でその氣分（見ようたしかめよう）をこはさずして行動、性情の善化と言ふことが出来るのではないでせうか。

(三) 害虫驅除につきて

農村故に尙更大切だが又その害虫を飼育して見る、そこに言ふに言はれぬ性情の教育をなすことが出来るのではないでせうか。

(四) 畑の觀察物を園内に引き入れたらつて

自然のまゝに幼児に觀察さすのも一つの方法だが又自然のまゝの形をこはさないやうにしてそのまゝ取つて來て幼児の觀察しよいやうにしてやるのも一方法ではないでせうか。

(五) 飼育器につきて

a 鉢にしつかりと金網の被ひを取りつけてしまふ豫定だつたのですが園長先生のどこへでもばつとその金網を伏せれば又そこで觀察さすことが出来るやしないかとのお言葉に從がひ金網に四本足をつけました。

b 同じ觀察物でも始めに螢籠へ入れたのでは餘り幼児も興味を起さなかつたが器物の變化（一寸した注意）により幼児の青虫に對する折角の觀察態度を逃さずに捕へきることが出来たことは、明かに幼児の觀察に對する態度も一寸の不注意で常に逃してゐるのではないかと叫ばれてゐるやうな氣がします。